

外国人 として 生きる

僕の幸せ

—ニッさんがタイ料理屋をひらくまで—

岡部 真由美 (おかべ まゆみ)

総合研究大学院大学文化科学研究科

看板に誘われて

大阪はミナミのど真ん中。夜になると一帯にネオンが輝くこのミナミの街に、ニッさんが店を構えてからもう七年になる。

昨年一〇月。北タイ・チェンマイから、わたしが調査中にお世話になったホストファミリーが来日し、わたしは彼らのもてなしに追われていた。いよいよ明日が帰国というときになって、ホストファミリーは、わたしとわたしの両親に対するお礼として、タイ料理をこちそうしたいと言いつつ出た。突然の申し出に困りかけたとき、たまたま目に飛び込んできたのがタイ国旗の付いた看板。何の迷いもなく店内へ入ったわたしたちを出迎えてくれたのは、偶然にも、ホストファミリーと同じ県、同じ郡出身の調理人だった。ホストファミリーは、ここが大阪であることを完全に忘れて、しばし北タイ語での話に花を咲かせていた。日本滞在の最後を締めくくる、よい思い出ができたと思う。そこがニッさんの営むタイ料理屋だった。

あれから約一年が経ち、再びニッさんの店を訪れると、その調理人はもういなかった。タイへ帰ってしまったらしい。彼の代わりに、ニッさんは自ら厨房に立ち、おいしい料理を手際よく作ってくれた。

働き、そしてまた働く

ニッさんの名は、ティーンラート・ウオンクリー。父親は警察官、母親は教師。経済的に恵まれた家庭の三男として、サコンナコン県で生まれた。ニッさん誕生後すぐ、一家はナコンラーチャシーマー県へと移住。育児のために教師を辞めていた母親がごはん屋を始めようになると、小学生のニッさんは、毎朝三時半起きて買出しを手伝い、学校が終わるとまた店を手伝う生活を続けた。このころ、母親から教わった料理の数々が、今のニッさんを支えている。

高校卒業とともに、ニッさんは思い出のつまった東北タイを後にし、首都バンコクで大学進学し、兵役についた後、運輸手、警備員など仕事を転々とした。

一九八八年、二六歳だったニッさんは、当時の海外出稼ぎブームに乗って、一路クウェートへ。初めての外国で、ニッさんは調理人として働き、稼ぎのほとんどをタイへ送金していた。しかし、タイへ戻ったニッさんの手元には一パーツも残されなかった。とにかく、働かねばならなかったニッさんは、続いて日本で働くチャンスを探る。「何県か知らないけど、アヤセというところ」で、中古車修理の仕事に従事。さらに二年間、大阪の飲食店で働くうちに、「日本で自分の店を開きたい」との夢を抱くようになり、いったんタイ

へ帰国した。

ところが、現実はその簡単ではなかった。再入国のビザが下りないのである。業を煮やしたニッさんは、日本語の能力を生かそうと、世界有数の観光地・チェンマイに飛び込んだ。そこで出会ったのが、日本から旅行にやってきた寧美さん。二人はめでたく結ばれ、結婚後、寧美さんも現地の旅行会社で働き始め、息子を授かった。出身地を遠く離れてチェンマイで出会った二人は、「自由のタイ」の意味を込め、子どもに「タイタイ(Tai, Thai)」という名前をつけた。それは現在、二人の店の名前にもなっている。

再来日は家族とともに

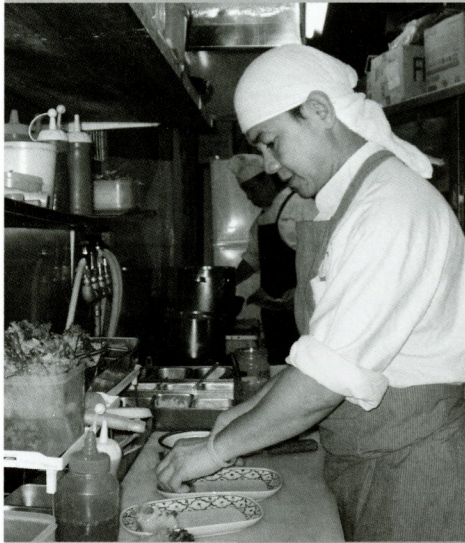
息子の誕生後、ニッさん一家が選んだ道は、大阪への移住だった。不思議なこと、一家を大阪に向かわせたのは、寧美さんではなく、ニッさんの方である。寧美さんは大阪出身ではなかったし、大阪に縁があるのはニッさんだけだったからだ。かつて自分の店をもつことを夢見て、単身でタイへ戻ったまま再入国が実現しなかったニッさんは、まさかこんな風に、自分が家族を連れて大阪へ戻ってくるようになるうとは思ってもいなかったのだから。

河内長野市内の食品用トレー工場で働いた後、一家はミナミに進出。ニッさんは

入り口の大きなタイ国旗が
お店の目印



厨房で腕を振るうニッさん



マッサージ店への客を笑顔で迎える寧美さん

忙しい仕事の合間を縫って
スタッフとともに



最近、力を入れ始めた
雑貨販売



知人のもとを訪ね歩き、自力で店経営のあれこれについて学んできた。二〇〇〇年一月。ついに、ミナミの繁華街・宗右衛門町の一角に、タイ語・日本語の曲がそろうカラオケ・パブを開店。続く二〇〇一年にはミナミのターミナル駅・なんば近くにタイ料理屋、二〇〇四年には料理屋の二階にタイ古式マッサージ店を開店。さらに雑貨販売も開始。今まさに波に乗っている。

両親、二人の兄ともに公務員という家族のなかで、ニッさんは一人だけ、場所も職業も転々としながら、しかし一貫して自分の力で身を立てて生きてきた。「もう日本に来てから七年も経ったのか？ あつという間だね」と笑って言うニッさんには、これまでの人生でぶつかってきた数々の苦労のかけらも見当たらない。そんなニッさんに将来の夢を聞いてみた。現在四五歳の彼の答えは、意外にシンプルだった。「ここでの生活に満足しているし、これ以上望むものは何もない。僕が働くのは、自分の死後、子どもが困らないため」。

今の日本に、家族の幸せが自分の幸せと断言できる人がどれほどいるだろうか、とふと思った。しかし、迷いなくそう言い切るニッさんと話すといつも、何かスポーツの後に似た、スカッとした気分になるのである。